2023.07.03　第１回美術館魅力向上検討部会
議事要旨

（１）美術館魅力向上検討部会の進め方（資料１）
　事務局から説明。委員からの意見なし。

（２）滋賀県立美術館の現状と課題（資料３）
　事務局から説明。

　①　コレクションの活用
【委員】この館の戦後アメリカ美術は非常に素晴らしい。リニューアル以降、あまり展示する状況にないのは非常に残念だと思うし、県民の方にそれがどのくらい伝わっているのかと率直に思う。その時々に幅広いコレクションを見てもらうのも大事だが、キャラクターとして滋賀県美にはこういうものがあるんだというものを、もう少し強く打ち出しても良いのではという印象を持っている。

【委員】この館のアメリカ戦後美術、大変素晴らしい作品だと思う。どれとってもそうだが、アーシル・ゴーキーなどもどんなに中国のコレクターがお金いくら積んでももう買えない、ものがマーケットにない。そういった意味では、こういう作品があるということは、日本の宝の一つだというふうに思っている。

【委員】県民の方は多分ここにまず美術館があることすら知らない。そして、ここにどんな作品があるかっていうのをわかっていらっしゃらない。こんなに所蔵しているものがあるんだっていうことがわからないと始まらない。常設というか常に展示できるものの量はやっぱり少ないような気がするので、もう少し展示するスペースがあった方がよく、その辺は考えた方がいい。

【委員】ＭＩＨＯ ＭＵＳＥＵＭと佐川美術館が県内にあって、両方ともここ（滋賀県立美術館）と比べ物にならないほどの来館者数が来ている。県美にも結構それと同じ価値のもの（作品）がある。美術館を巡るという意味ではやっぱりＭＩＨＯには集客力があるので、その方々を高速で１本、高速はなく下道でも 20 分 30 分で多分行けると思う、行こうと思ったらタクシーで巡ることだってできると思う。そういう意味では、きちっとしたコレクションがあるのであれば、それをちゃんと見せる、いつでも見られるということは重要だと思う。

【委員】アール・ブリュット作品も、裾野を広げるって意味ではやはり、なかなか難しい作品はお子さんが見てもわからないが、アール・ブリュット作品から美術を学ぶことができると思う。そういう意味でもアール・ブリュット作品も、企画展で披露してみせるのも必要と思うが、やっぱり常に見られる状態にしておかないといけない。

【委員】(日本財団から)それだけのものが入るっていうことは、やっぱり責任が発生する。当然、戦後アメリカ美術や日本の院展作家などのコレクションがなくていいとは全然思わなくて、そういうものもあっての上での話だが、アール・ブリュットがこれだけ集積する場所って、日本で他の美術館にはない状況だと今のお話で思った。こういうものをぜひアピールすると同時に、この美術館が、そういう情報や研究など、今の状況を考えると、センターになってもいいように思う。
　それで先ほどもお話あったが、それをうまく使うことによってこの館の活動がより活性化していく、ここから入門していくっていう発想もあるだろうし、一つの特徴として、キャラクターとしてという話もあったが、こういうコレクションをフルに使うというか、看板の一つにしていくということはとても重要じゃないかと思う。

　②　既存施設の老朽化

【委員】やはり展示室全体面積が他と比べると狭いという認識はすごく持っている。コレクションの活用とか、企画展のことを考えると、もう少し広い展示スペースであったり、もう少し天井高の高い、常設展かコレクション展用のスペースがあると良いと思う。他の県立美術館だと 1000 平米必ず超えてくるところだと思う。リニューアルにあたっては、ぜひ県立美術館規模としてどのような展示室を持つべきなのかっていう議論もあっても良いのではと思う。

【委員】大阪（中之島美術館）も作るときに、企画展示室はどれくらいの広さが適当かという議論をしたことがあって、県立美術館レベルでの巡回っていうと、大体どれくらいの面積が必要か、1000 から 1200 ㎡ぐらいっていう数字が当時あったと思う。1200 ㎡が大体県立美術館レベルかというような印象を持っているので、そうすると（滋賀県立美術館は）ちょっと小さいと思う。

【委員】こういう設備の工事と建築は、問題が起きたら直してみたいなことをやっていくが、一度に工事した方が安くなるのは当たり前。行政としては年々ちょびちょび予算を取っていく感じなので結果として結構大きな金額になってしまうということがある。何が言

いたいかと言うと、やはり（既存施設・設備の）リニューアル計画、展示スペースを増やすだとか、そういう大きな計画があるときに一遍にやれるようにしておくのはすごく重要で、ちゃんとプログラムを考えておいた方がいい。集客が見込めれば予算もとれるわけだし、県としても、おそらく全然人数も集客力もなく人も増えてないのにそんなお金かけてどうすんだって話になってしまうので、いろんな展示もこれから増えて人も多く見込める、そういうアピールもしていって、キャラ立ちもさせていくっていう中で、これだけ見込めるからちゃんと設備も綺麗にしましょうという、そういう話を計画として今回のビジョンでまとめることはすごく重要だと思う。やらないといけないのは当たり前だし、やはりそういうビジョンを掲げてきちっと大きなお金を取って拡充していくっていう前提で、設備もその際に全部綺麗に新しくすることはすごく重要と思った。

【委員】公園との関係はこの美術館のポテンシャルというか、他の美術館にはない重要な要素。公園を生かすのだったら外との中の関係で、そういうのを改善できる方法を、ここで他の美術館にないやり方を提案すればいいと思うし、アピールにもなると思う。

【委員】1 回でやると安く上がるっていうこともあるし、あそこの館はしょっちゅう閉まっている、みたいなことを印象づけてしまうのは、あまりいい手ではない。これからより多くの人に来ていただこうというときに、また休んでるよ、ということになるのはいいことではないので、やっぱり（設備の工事は）集中的にという手法の方がいいのではないかと思う。

③　利用者利便性／④　野外空間の活用

【委員】（小野田委員のメモを受けて）まさにここに書いてあることがとても重要で、関西、三重、名古屋からも、新名神がありかなり便利な場所なので、そういう意味ではそちらからも来てもらう必要もある。長浜とか北陸の方からも来られる、その辺のネットワークをちゃんと作っていくことも重要。6 キロ 7 キロ圏っていうのが、大学から近いように見えて、歩いては行けないし、自転車だと結構大変みたいな距離の中で、それこそ車なり電気自動自転車とか書いてあるが、やはりそういうものがあればその周辺にはたくさん繋がるものがある。小野田先生が意識しているのはアール・ブリュットなのかはわからないが、福祉系の施設。作業所だとかで障害者がされているカフェとかそういうのも結構この周辺にあったりするので、ネットワークができる。ここには甲賀市は入っていないが、甲

賀市にやまなみ工房があって、世界的に有名な場所だと思うが、そういうところと連携されているわけなので、ちゃんとこのエリアの特性をもう１回確認する意味では、すごく重要な資料だと思った。やはり皆さんもおっしゃっているようにアクセスがひどい、悪いので、車持ってないと来られない。来る気も起きないし、立命館大の学生も大学から行こうと思ったら一旦 JR の電車で瀬田に行ってバスに乗って、みたいなことで、先生そんなんじゃもう行きませんみたいな感じになってしまっているので、公共交通のアクセス性を変えて補充すれば、かなり行きやすい場所になると思う。

【委員】龍谷大学との間の通路に通り抜け禁止の柵があった。公園の中をたぶん大学生が自転車でびゅんびゅん通ったら危ないとかそういう話から始まったと思うが、近道があるのにそこを通してくれないのは非常に理不尽。あそこを開けたり、西側の方の大きな野原の広場のあたりもカフェができていたりとか、あれもできたばっかりですよね。あの辺りにたくさん人が土日には来ると思うが、そことの繋がりが無いのが非常にもったいないと思った。

【委員】現在は学生が行く目的になっていない。美術館が学生が行ったら楽しい場所だっていうことをどう伝えるかっていうことが重要。公園で遊べるのはもちろん重要な一つのコンテンツになっているので、周辺の公園とどういうふうに連携して、美術館見た後に公園へ行って、食事して、それで公園でも遊んで、みたいなことをすれば時間を費やせる。そういう部分で美術館と公園がどう連携していけるかという話だと思う。

【委員】アクセスは申し訳ないが本当に悪いと来るといつも思っている。アクセスは公共機関と連携をして云々っていうことにしかなかなか解決が見出せないと思うが、アクセスが悪くてもやはり見に行きたいものがあるとみんな行く。滞在型の役割の拡充ということは一つポイントかなと思う。展覧会をどうしても見たいから行くっていうこともちろんあるし、一般の方だと例えばそれが公園に行ってついでに美術館に行ってみようとか逆の発想、美術館が必ずしもメインの役割でなくても良いのかなと思う。美術館の役割を、展覧会をやることを、所蔵作品を見ていただくことだけではなくて、地域に根ざす美術館として、どのような役割が考えられるのかっていうことを、ここでもう少し考え直してもいいのかなと思う。都市型ではなくいわゆる郊外型公園の中にある美術館として。美術館だけではなく、それが公園だったり、さっきおっしゃっていたように近隣の施設とも、どの

ようにネットワークを取っていけるかも一つポイントだと思う。

【委員】アクセスが悪いというのは逆説的に考えると、アクセスが悪くても来れる人に対してどうアプローチしていくのかっていうのが一番早い。以前海外でオーディエンスディベロップメントの調査をした中でも、ある美術館は、自分たちのターゲットは 10 マイル以内の人です、10 マイル以内の人たち向けのアピールしかしませんっていうのをすごく言っていたこともあった。10 マイル以内の人たちが来れるためにはどうするかっていうことをやって、例えばフードトラックを呼んで一般の人が来やすいようにするとか、どちらかというと来るための敷居を下げるための取り組みっていうのをたくさんやっている。
アクセスの改善はもちろんできればいいので、アプローチしていけばいいとは思うが、それだけにとどまらず、現状近くにある大学の人とか図書館とか近隣の住民の方とかがどうやって美術館を日常使いできるようになるのかっていうことを考えていくっていうことも、心理的なアクセスのしやすさを向上させるということで重要と思った。

⑤　教育交流事業

【委員】（美術館が）直接来館者利用者に対してサービスするみたいな形の教育普及活動は、パワーとしてかなり限界があると思う。ここを様々な人たちが行き交うような場とするにあたっては、美術館がどうするというところを一歩ずらして、美術館で何かする人たちを増やすことにシフトしないといけないのではと考えている。この美術館を題材として活動する若者たちをどうやって増やしていけるのか。そのためには大学の先生たちに関わってもらうってことが、まず一番手っ取り早いと思う。

【委員】若者をどうやって美術館と関連づけて来てもらいやすくハードルを下げられるかところでいうと、何個か海外調査した中であったのは、美術館の中に若者の組織を作ってしまうのがけっこうあって、例えば、年１回なんでもいいので企画してもらう、ある年はバンド大会みたいなことをやったり、あとはダンス大会をやったり、全然関係ないんだけどミュージアムでなにか活動するっていうこととして、家族が来たりとかいろんな人が交流する場になるっていう意味で、ひとつのきっかけにはなる。近隣に学校とか大学とかけっこうあるようなので、そういうところと連携していくっていうところで、単純に鑑賞してもらうとなると、やっぱりなんというか美術館は説教くさいみたいな、そういうイメージを持つきっかけになってしまうことが逆に多くなる。そうではなくて単純になんでもい

いので楽しめる場であるということを刷り込ませるという意味で、接点をつくるっていのがいいのではないかと思った。

【委員】その地域の、直接アートに関係ないイベントをやってくのは一つかもしれない。直接その人たちが全員展覧会行くとか展覧会の関係でというだけではなくて、今までだったら来なかった人が来るということは十分にあると思うので、そういう視点もあってもいいかなと思う。

一方、ここの館というのは、地域の中での役割と、県全体の中でのリーディングミュージアム、両方を果たさなきゃいけないっていう面があるので、そこがちょっと大変なとこだと思う。どっちかにしちゃえばいいということではなくて、その辺、子どもたちでも来れる人ってやっぱりある程度周辺大津の人が多いわけで湖北の子どもが学校終わった後に来れるかというとあまり現実的ではないということもある。そういう地域に対するきめ細やかな対応もする。やはり県、県にある美術館として、その地域ではできないこともしなきゃいけないっていう、両方がここに課せられてるのかなと思った。

⑥　多様な鑑賞者への対応

【委員】多様な鑑賞者っていう意味では、敷居が高く見えてしまうというのがあるので、実際に来た方が使いやすいと思ってもらって、それを口コミで広げてもらうっていうことだと思うし、障害者はアール・ブリュットとの関連性もあるかもしれないが、そういう方々が何にもバリアなくちゃんと見られることを売りにするのも一つなのかなと考えていた。

⑦　ギャラリーの活用

【委員】無料のスペースなのでチケットなくても入れるとか、やっぱそういう中でやっている様子も見にくいので、ちょっと閉鎖感がある。敷居の高さが美術館としてそういうことも必要だけど、今みたいな地域交流とか大学との連携のようなことをやろうと思うともう少し入ってエントランスすぐのところに見えるとか、そういった動線の課題はあると思った。以前、学生の卒業設計でやらせていただいたのはギャラリーだった。建築の模型とかを展示する上では使いやすいと思ったりもするが、展示物によって使いにくいとか使いやすいっていうのは多分ニーズがあると思うので、その辺を把握した上で、課題があるな

ら直さないといけないし、もう少し別のスペースが必要なのかなという話だと思うので、そのあたりは検討するための情報が必要かなと思った。

【委員】こちらに伺うと、ギャラリーの場所はとてもいい場所にあると思う。企画展示室を見終わって、ふっとそこにギャラリーのスペースがある。ガラス張りで使い勝手が悪いっていうことは書いているが、一方で、美術館内のロケーションとか位置は非常に良いのではないかと思っている。美術館側としてはこのギャラリーをどのような形で今後も活用していかれようとしているか。

【事務局】現状の課題としては、先ほども良い場所にあるということをご指摘いただいたが、逆にいい場所すぎて、搬入動線がきちんと切り分けられていない。美術館の企画展示などの作品の動線とギャラリーの搬入動線が一部クロスして、共用するような状態で運用が非常に難しく、作品の環境上も良くないということもあった。リニューアル後は、元々のギャラリーの搬入動線は使わないということにして、お客さんの動線と同じくエントランスから台車あるいは手運びで作品を入れていただくような運用に変更した。そうなると実際のところの使い勝手としては良くないというようなお声をいただいていて、稼働率が低迷している背景には、そういうような要因もあるかと思っている。館としては、ギャラリーに関しては、できればもう少し使い勝手をよくし、利用者の方にとっても、館としてもハンドリングしやすい場所に改められないかということを今イメージとしては持っているという状況。

⑧　文化観光・連携拠点

【委員】美術館と他の美術館の連携は僕には分からないが、このびわこ文化公園は公園自体がいろんな要素があるので、大学の連携もそうだし、自治体との連携、大津市もだが、草津市もあるし、周辺との連携もある。アール・ブリュットの話だと甲賀市とかそういう他の自治体、県の美術館なので全部を包括している館だと思うが、その辺の地域連携はすごく重要なので、何かもう少しギャラリーも含めて、他の地域だとか地域団体が使えるということをアピールして使ってもらう。そのときにお金の話があるかと思うので、もう少し地域貢献とか地域との連携の場合は、無料で使わせてもらうとか、そういう話が必要と思った。もうちょっと敷居を下げるために、市民との連携を考える必要があると思う。

【委員】湖西だと成安造形大学もあって、地域連携の学部もしっかり頑張っていらっしゃる。あとは、ちょっと遠いが彦根の方にも滋賀県立大学もあって、街づくりとかデザインとかいろんなことされていて、羨ましいと思う。本当に大学があるって大事なことで何か未来を感じている。現在、大学生の入館料は無料じゃないんですよね。キャンパスメンバーズ的なものはあるってことですよね。可能性としては、ここでやる大学生の課外活動あるいは本編の教育活動との連携の意義を見出せたら、寄付をもらいつつ、そこで有料エリアも使った活動ができるということになるので、その大学生たちはかなり広がるのではないかと思った。大学についてはもちろん市民皆さんもそうなのかもしれないが、敷居が高いっていうのを、敷居を下げるどうのこうのっていうよりも入りやすければ一番いいのでは。

【委員】展覧会に行く以外の目的の人を連れて行くことがあるかなと思っていて、あまり難しい話ばかりじゃなくて、例えば本当に朝市みたいなものをやるとか、夏祭りのようなものをするとか、何でもいいが、まずは来る環境を作るということで、来た人の中で一部の人は展覧会に関心をもってリピーターになってくれるかもしれない。その時はまた別のサポートが必要になってくるが、まずは来るきっかけを作るっていうところ。結局全国で美術館へ日常的に行ってる人なんて人口比 10%もいない訳なので、そう考えたときに年 1 回でも来てくれるっていうのは相当なハードルを下げることにもなると思う。まずはそういう場を提供していくことは重要と思う。

【委員】文化観光だが、ここの公園全体をこの美術館が担うっていうのはちょっと重すぎるという感じがする。公園の方は公園の方でということはないが、公園として今、パーク PFI の受託者があるが、これはどちらかというと管理する方だと思う。より積極的に打って出るというか、人集めに行くというか営業しに行く、そういうところが必要という気がする。私もバスで来て地図を見たら、美術館や図書館のある区画よりも全体の方がすごく広い。そこのところをどう生かしていくかというのを美術館が一生懸命考える。もちろん美術館がそれを利用するという意味で考えることは重要だが、ここをどうやって人が多く来てもらうかっていうことを、やはり公園の方も主体的に考えていただく必要があるのではないかと思った。

⑨　デジタル・アーカイブ化

【委員】コレクションについてのデジタル・アーカイブ化ということだと思うが、アーカイブ的な整理をデジタルのソフトを使ってやっていくということは、外部が使う使わないともかくとして館としても重要なことだと思うので、一朝一夕にはできなくても、進めていただけたらいいと思う。継続性を前提にしたアーカイブ作りは、将来的にも重要になる。

【委員】デジタル・アーカイブ化は、私も今主担当で、和歌山の場合は県立３館合同で横断検索ができる和歌山ミュージアムコレクションというのをまずこの春に立ち上げた。ここと同じ会社のシステムを使っている。そこに県内の他の市町村館、あるいは私立館のコレクションを加えていくことで、和歌山に所在している文化財やコレクションの総体としての魅力を発信するためにと思って、まだ画像もたくさんではないがとりあえず箱だけは作った。
これは３ヶ年計画で何とか形にしていこうとやっているところだが、絶対一朝一夕にはできないので、かつ、どんどんどんどん変化していかないといけないものだと思うので、気長にやった方がいいとは思う。ただどんな形に作っていくのか、それをどうやって使っていくのか、誰が使っていくのかということは、しっかりみんなでもんだ方がいいと思う。
実は本当は最初に伺いたいことでもあったのだが、私達がどうこう言うよりも結局この館の中の人たちがどういう特性、特技を持っていて、どんなキャラで、どんな関心を持っていてこの美術館をどうしたいと思っているのかっていうのが一番大事で、それとコレクションがどう関わるのか、それとこの立地環境はどう関わるのかってことをブレストしていくのが必要なんじゃないかなと思っている。
そのときにコレクションが外に見えている形にするというのは非常に大事だと思う。かつ、アメリカの戦後の美術だと著作権のお金もかかってくるから、そんなに古いところのコレクションがやっているのとは全然違って、手間もお金もかかってしまうっていう課題はもう重々実感しているけれども、それを売りにするのだったら、データベースを魅力的にしていくっていうのは非常に、改修工事と同じぐらいのエネルギーを持って県に訴えていくべきところではないかなと思う。